SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

ジェイン・オースティンと幸福感

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 実佳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006813

ジェイン・オースティンと幸福感

鈴木実佳

● はじめに

イギリスやアメリカで、ここ十数年の間に、ジェイン・オースティン（Jane Austen, 1775-1817）の人気が再燃している、と少なくとも英文学者は歓喜しながら思っている。希望的観測だけでなく、彼女が多くの研究論文の対象となり、また、熱狂的ファンを生んだドラマ化や映画化をきっかけにして、一般にも高い人気を誇る作家となっているのは、事実だろう。[1] ところが、ちょっと翻訳でも読んでみるかと手にとってみても、紹介文や入門解説書を読んでみても、彼女が書いた小説は、経済的に微妙なところに位置する若い女性の結婚相手獲得物語で、単なる甘いロマンスと思う人にとっては、たいして興味をもって読めるものではないかもしれない。しかし、少し注意して読んでみると、文学研究者だけでなく、どんな立場に立つ人でもそれぞれにとって彼女の作品は面白い存在となり得る。

● 癒し

第一次世界大戦で心の傷を負った兵士たちに、リハビリの一環としてオースティンが勧められたのは有名な話である。オックスフォード大学のチューターだったブレット・スミス（H.F. Brett-Smith, ?-1951）が、第一次世界大戦中、病院付きの負傷兵読書案内人としての任務にあたっていた際、重い砲弾ショックを病んでいる人々のためにはオースティンを選んだと記録されている。これを挙げているケントの論文では、「彼女の作品の平穏に心癒され、歴史の犠牲者たちが破滅から逃れることができた」という主張がなされ、この証拠は、過酷な歴史の現実とは乖離したオースティンの世界という一般的認識を支えるために使われている。そしてそれを踏まえた上で、実は彼女の作品は歴史と深くかかわっていることをケントは検証していく。[2]

このブレット・スミスという人物については、あまりよく詳細がわからないのであるが、オックスフォードで英文学のチューター及び講師として長年勤めて、ゴールドスミス助教授（Goldsmith's Reader in English）にもなったことのある人物である。死亡記事では、口数少ない変人学者の典型のように描かれる。書物を熱烈に愛する文学者だ。学者の中でも特に書物の収集で知られ、詩作も得意としたが、チュートリアルでは滑らかに学生との人間関係をつくるというよりも、コミュニケーションをとるにはコツが要るという類の人物だったらしい。講義の特色は、博識と「とぼけたユーモア」である。学者としての仕事では、風刺家の傾向が強いピーコック（Thomas Love Peacock, 1785-1866）全集の編者として手腕を発揮した。[3] 確かに、深い洞察力をもち、一筋縄ではいきそうにない、とぼけた味のありそうなこの学者が、単に「平穏で心癒される」甘い読み物としてオースティンを見ていたと思うのは、単純すぎるかもしれない。それに、オースティンの作品が、微妙なアイロニーに満ちているのは、多くの人が認めるところだ。オースティ

イン的だと認める文章の特徴について、イーグルトンは「抜け目なく、人々を面白がって、制御が利いていて、斜に構えて、皮肉で、抑制されているのだけれども、一方で、時折研ぎ澄まして痛烈な当てこすりをやろうと思えばできる」と表現し、その甘さというよりも、狡猾な鋭さ、それもその鋭利さを隠蔽するという知恵も備えた切れを指摘している。[4] 確かに、「言い知れぬほど穏やかでぬくぬくとした架空の世界に逃避することのみを求める人々は、故意に彼女の小説を読み違える」と言われるように、波風立たない守られた世界だけを読み取ろうという意図にも、彼女の作品はそれなりに応えてくれる。ただし、それは彼女の世界がただの平穏なのではなくて、意図的な読み違いに耐える順応性をもっているということだ。[5]

インド生まれで、インドでのジャーナリストとしての経験をもち、一九〇七年にはノーベル文学賞を受賞したキプリング（Rudyard Kipling, 1865-1936）は、短編「ジェイン愛好家」“The Janeites”を一九二四年に発表した。これは、第二次ボーア戦争中の一九〇〇年に南アフリカで戦争を目の当たりにした彼の体験がベースになっていると言われており、この作品もまた、オースティン作品を読むことと、第一次世界大戦を結びつけている。ただし、今度はオースティン作品は、戦場での体験を想起させる。砲弾ショックを病むハンバーストールという人物が、戦場での秘密結社のような、オースティン作品を知っていることで結びついていている人々のことを大戦後に語る。彼らは、オースティン作品から抽出した合言葉で通じ合うことを楽しみ、軍隊内の地位にかかわらず、オースティン作品を通じて仲間意識を形成していた。彼は、帰還する人々を乗せる列車が混み合って乗車が危ういときにも、オースティン仲間を見出して、そのおかげで無事帰ってくることができたと認識している。[6] ただし、愛好家仲間のうち、生き残ったのはハンバーストール彼のみで、愛好家仲間の存在は彼の語りによってのみ伝えられる。戦場で形成された「幸せ小グループ」“appy little Group”（語頭のhを発音しないコックニー訛りという設定）について、戦場での精神的苦痛から砲弾

ショックに見舞われているハンバーストールが懐かしげに語る。

そうしてみると、「オースティン・セラピー」は、単純な癒しを求める人には、長閑な慰めを提供し、それに飽き足らない人には、別の楽しみを与え、どちらも満足させる療法で、ブレット・スミスの選定は、深い意図をもっていると読み取ることができるのだ。

● 『エマ』の幸福感　euphoria

テリー・カースルは、オースティンの『エマ』（一八一六）への前書きで、この作品の真髄は喜びであると主張し、それがどのように与えられているのか分析している。喜びの要因はひとつではない。まず第一に、知的自己満足が挙げられている。オースティンを読むと、世界は読み解くことができるものであると想定するようになり、何かを掴んだという感覚、把握可能であるというその認識が喜びとして残る。次に、パズルや謎を解く楽しみ、探偵小説を読むような楽しみ、と続く。[7] そしてこの特質を表現するのに使っている“euphoria”という言葉に注目してみよう。この語は、現在では一般的には「陽気な状態、特に、自信過剰あるいは過度の楽観による場合」を示すのに使われるが、病理学では「良好な状態、あるいは健康な人の完璧な快適で楽な状態、特に、病気の人がその感覚を得た場合」を表現するのに使われる。[8] 勿論、カースルは、この語がもつ「特に」以降の記述に含まれる一時性や誤謬を意識している。フィクションが与える幸福感には、そうしたまやかし的な要素が入らざるを得ないので、偽の世界の出来事を読んで得られる感覚をこう表現するのは、適切ということになる。一方で、カースルは、その議論の途中で、「この幸福感は本当である」とわざわざ差し挟んでいる。[9] それは、オースティンを読むことによって得られる喜びが、「自信過剰」

や「過度の楽観」によって得られる幻想ではないということを示したいからである。作品を通して読者に呼び起した感覚は、一時的であることはあっても、現実の読者の現実の感覚であるのだから。あるいは、病気の人が感じる快適さが、ほんものであるということだ。知的刺激を与えて読者の頭の動きを活発にし、積極的活動を促して、知的満足から得られる幸福感を提供するだけでなく、心を癒すリズムをもって物語が進む。この世界では、「気を回し過ぎて最悪の状況を想定」するがままになったり、善意の人が自分ではどうすることもできない運命の歯車に巻き込まれて不幸になるというようなことはなく、人々と世の中が常に安定したあるべき状態へと修正しようとしている。[10]『エマ』の中では、子どもが中心的役割を果たすわけではないので、何気ない背景の一部であるが、子どもは宥められ守られる存在であることを挙げて、子どもの描写が、安楽を保って私たちを守ってくれる社会の印象を与える基調を作っていることもカースルは指摘している。[11]守られているという印象が、幸福感に貢献する。

カースルは、オースティンの作品が読者に与える幸福感に注目したが、ジョンソンは、オースティンの『高慢と偏見』(一八一三)を幸福の追求の物語ととらえ、幸福の追求を語ることのメッセージ性を分析している。彼女は、その社会的・政治的意味を、保守的価値観に最も肯定的なこの作品で、個人の幸福の追求を中心的テーマとして描くことに認めている。[12]ダーシーのような富裕な大土地所有者が、道徳的優越も備え、さらに、ヒロインが結局はその彼と幸せに結婚するというおとぎ話的な結末をもつ物語ととらえることは、一般読者の間でのオースティンの人気の理由をある程度説明するかもしれないが、この作品の重要性を見失っているという主張である。伝統的・父権主義的価値観と、個人主義的価値観の間の葛藤が、結婚のハッピーエンドで収拾を迎えるのは、詩的結末であって、小説の設定で提起された社会的問題を回避するものだという議論に異を唱えて、ジョンソンはその結末こそ、おとぎ話の世界への回避ではなくて、積極的コメントなのだと論ずる。[13]この物語で、個人の幸福追求を肯定することは、確かに、進歩的

信念の肯定であり、それを伝統的価値観を肯定する社会に埋め込む柔軟性が、オースティンの一つの特色である。「オースティン・セラピー」及びカースルの言う「幸福感」と、ジョンソンの「幸福の追求」を踏まえて、『分別と多感』（一八一一）の恐れと希望に注目して、次節では危機的状況に陥った登場人物の状況への対処、自分の気持ちの処し方を細かくみてみよう。ここに示したのは、偽りかもしれない幸福感に関心を絞って、それにだけ注意して読んだオースティンである。本稿は、彼女の作品が、読者の主義や立場、一時的に置かれている状況、その他によって読者が求めるものに応ずる能力をもっていることを示す一例を付け足したに過ぎない。[14] こんなふうにして特化して読むことは、嘲笑されるだけで、批評家には「ジェインを愛好家から救う時がきている」と言われてしまうかもしれないが、オースティンの世界を少しでも読み解く第一歩を踏み出してみることにする。[15]

● 病人の看護

世話をしてもらう人の描写に注目して、『分別と多感』での病人をめぐる幸福感をみてみよう。オースティン作品の重要人物で病人といえば、『分別と多感』のマリアンヌが、まず第一に思い浮かぶであろう。『分別と多感』は、メアリ・プーヴィーによれば、「暗く」「陰鬱な傾向」をもっている作品であり、その傾向は、個性的で活発な登場人物と、個人の自由な活動を抑制する道徳観の間の葛藤と不安から生じているものと分析されている。[16] 感受性を代表するように描かれているマリアンヌが、失意の感情に支配されて身体の福祉を顧みず、健康を害して、その自己憐憫にのめり込むような自己中心的な感受性過多が批判的に描かれ、オースティンが感受性偏重の文化を揶揄したと、この作品が解説されることがある。[17] 自己憐憫と言えば、『高慢と偏見』でのベネット夫人が嘲笑の題材を提供してくれる。

彼女が「気に入らないことがあると自分が神経を病んでいると思いこむ」ことに夫はもう慣れていて、自分の「苦しみ」と「哀れな神経」を誰も省みてはくれないと言って、不満を述べても、夫に軽くあしらわれるだけだ。[18] マリアンヌの感情に支配される様子は、これとは違って、嘲笑の的になっているものとして読む読者は想定しにくく、感受性偏重批判というだけでは片付かないもので、病人とその周囲の人々について他に伝えるべきことがあると思われる。病気の場面は、短く語られ、ほんの数ページから、かなりの部分を引用することになるが、この短い間の、近しい人の病のときをめぐる周囲の人々の描写は、無駄がなく、凝縮されていて、そこにオースティンが描き出す世界の充実ぶりを垣間見ることができる。

映画『いつか晴れた日に』（一九九五年、原題 *Sense and Sensibility*『分別と多感』）では、ウィロビーが他の女と結婚することを知ってからというもの、マリアンヌは失意と悲嘆に捉えられ、荒天の中、慣れない土地をさまよってずぶ濡れになってから、病は着実に彼女をとらえて離さない。単に気が滅入ってふさぎこんでいるだけではなくて、病として深刻であることがわかってからは、一気に彼女を死の淵まで連れて行く。医者も「覚悟しなさい」とエリナーに伝える。その夜、それまでは一人しっかりしているように見えたエリナーが、「私を一人にしないで」と熱でうなされて意識朦朧としているマリアンヌに懇願する。冷静で賢いエリナーにとって激しい感情に翻弄されやすいマリアンヌが必要な存在であることを、マリアンヌの意識に届いたかどうかはわからないけれども心をこめて訴えて、エリナーは何よりも自分でそれを確信する。幸いなことに病はそこで峠を越えて、マリアンヌは回復に向かう。映画でのマリアンヌの病は、悪い状態のピークに向かって後戻りすることなく悪化し、疑いようのない深刻な状態を唯一のピークとして、劇的に悪化し、そして劇的に改善する。病人は一直線に悪化し、高熱で意識が朦朧とした状態になるので、途中で一時的に楽になるような暇はない。また、それに伴い、付き添うエリナーも一気に心配の真っ只中に落とされ、

そして一気にそこから救いあげられる。

原作では、マリアンヌの病はこんなに劇的ではない。病状は、一進一退を繰り返す。この「ひどい風邪」を、一日二日は誰もがたいしたことはないと思い、あるいは「ひどい」風邪だと誰もが、そして本人が認識するが、それでもよく眠れば大丈夫だと思われる類のものである。翌朝マリアンヌは平気を装うが、悪寒におそわれ、その次の朝は起きてくることもできなくなる。この後は、病の波が去ってしまうまで、マリアンヌは看られる人になり、彼女がうなされて口にする言葉以外は会話もなく、彼女の感覚や感情も描写されなくなる。彼女の容体の尺度は、脈である。薬剤師も、エリナーも脈をとる。悪くなって三日目には、薬剤師がもう大丈夫だと言い、エリナーはそれを信じて明るい気持ちになるが、その夜、マリアンヌが口にするのは、「お母さんは来てくれるところなの?」で、ウィロビーでも、そこにいるエリナーでもなく、母親を求める。そしてまた、「ロンドン廻りで来るのだったら間に合わなくて、もう二度と会えないということだわ」と言うので、それ以前にも寝苦しそうにしているのはわかっていたが、マリアンヌが意識朦朧としてうわ言を口にしており、その状態が尋常でないことをエリナーが決定的に理解する。[19] 彼女たちは、ロンドンで過ごして、母親のいるバートンに帰る途中で寄ったクリーヴランドというところに滞在しており、バートンからロンドン廻りでクリーヴランドというのは、名古屋から静岡に来るのに東京経由と言っているようなもの、あるいはそれ以上に、普通に考えたらおかしな旅程だからだ。そのうわ言に、エリナーは愕然とする。こういう経過をたどるので、病人自身が一時的に楽になって幸福感を味わうという描写はない。苦しみと安堵の激しい行き来を味わうのは、エリナーである。そしてこの点でマリアンヌの病の場面は注目に値する。介護人の心配と安心である。エリナーの心の叫びで姉妹の絆が確認されることになる上記映画のような派手さはないが、付き添うエリナーと、その周囲にいる人々の描写が注意深くなされている。

最初にマリアンヌの調子が悪いと認識されたそのときから、ここの人たちは、皆が周囲に集まり、病人およびその介護人を孤独にしない。介護人になりたがる人に事欠くことなく、大方はアドバイスを与えたい人たちと化する。「そういうときはああしなさい、こうしなさいとすべての人が処方した」[20]。薬剤師が、「伝染性」の病の可能性を示唆したので、乳児のいる屋敷の主人たち（パーマー夫妻）は、子どもを守るために別の家に避難するが、ジェニングス夫人とブランドンは傍にいることで、病人マリアンヌと看病するエリナーをもりたてようとする[21]。医療のプロとして、この看護に参加するのは、薬剤師のハリス氏であり、彼の見立ては常に楽観的である。自分の処方が功を奏することなく危機的状況に陥ったときに、エリナーが他の医療関係者の介入を求めようかと提案するが、それは必要ないといって提案を退け、別の薬を試してみる[22]。結局その後マリアンヌは快方に向かうので、彼は、頼りになるプロだとわかることになるが、一貫して楽観的すぎて看護人であるエリナーにとって大きな存在とはならない。

この危機に存在感を示すのは、医療のプロよりも、いつもはおしゃべり好きでマリアンヌからはけむたがられているジェニングス夫人と、周囲の人からは尊敬されながら、マリアンヌには枯れた中年としか思われず、好意を受け止めてもらえないブランドンだ。この二人は、愛情深く、それゆえ事態を深刻に受け止めている。職業上この件に関わる薬剤師とは対照的に、彼らは悲観的観測をもっている。そのせいで、口先だけの気休めも言わない。いつもは余計なお節介焼きのジェニングス夫人が、このときばかりは賢明に、口出しし過ぎることなく、適度に思いやりを示すしかたで心配する。実際の看護はエリナーが行うが、ジェニングス夫人は、若い娘の様子を純粋に心配する「母親がわり」を務めようとし、「看病の経験が豊富だったので」、「助けとなるのを厭わず、役に立つ」協力者となっていて、エリナーはジェニングス夫人を非常に好もしく思った。看病の場は、おしゃべり好きの未亡人を豹変させた。ゴシップ好きの軽口を空虚な慰めの言葉にすることはない。そして、「エリナーに慰めの言葉をかけようとはするが、「マリ

アンヌ」が危険な状態にあると思っていたので、希望があると言って慰めることはしなかった。[23]」彼女は、徒に楽観の言葉をかけることはない。

ブランドンが、余分な干渉をしないのはいつものことだが、彼はひとり自分の心配と戦っている。憂慮を彼らしく理性的に否定しようとするが、マリアンヌを大切に思う分だけ、「あらゆる憂鬱な考えが入り込んでくる」のに抵抗することができない。[24] はじめのうち、エリナーは、妹に注意を傾け、看病してはいるが、ブランドンがびっくりするほど「平静」で、「まったく不安を感じない[25]」。薬剤師を呼んだのも、悲観的に事態をとらえているジェニングス夫人の勧めがあったからである。薬剤師の診断を聞いた後でも、家に帰って母親に会うのが遅れることを嘆くマリアンヌを元気づけながら、たいした延期にはならないだろうと楽観を保つ。そのエリナーが、事の重大さを察知して、恐れに圧倒されようとしているとき、頼りになるのはブランドンだ。まず、彼は常に待ち受けてくれているということをエリナーは知っている。看護人にとって、同じ家の中に誰かが常にスタンバイしてくれているということは、どんなに心強いことか。助けが必要だと判断した今よりも「ずっと遅い時間でも、[ブランドン]」がそこにいるということを彼女はわかっていたので」、居間に下りて行った。ブランドンは「彼女の恐れをぬぐい去る勇気も自信もなく、だまってうちひしがれながら彼女の心配事を聞いてくれた。[26]」ここで彼も、無責任な励ましなど口にしない。ただ、マリアンヌが母親を必要としているとエリナーが思っていることを即座に察知し、母親を迎えにいくことを引き受ける。娘が病に伏して危ない状況にあることを知って、娘のところに駆けつける母親、それもその娘を溺愛していて、しかも普段から感情に動かされやすい母親に付き添う人物としてのブランドンがここで次のように描写される。「判断力をもって導いてくれ、心遣いで人に安心を与え、友情をもって慰めを与えてくれる同行者」となってくれるような「友人をもっているという慰めは、なんと有難かったことだろう。」「このような呼び出しを受けた人のショックが減

ずるとしたら、彼の存在、物腰、助けこそがそれを成し得る。」[27] マリアンヌの健康上の危機に関する心配については、それを取り除くことはできないと知っているので、彼は和らげようとはせず、貢献できることを見つけ出し、それがわかったら、彼の行動は迅速で無駄なく、手配すべきことはすべて行い、彼が迎えに行っている間、過度の心配と期待をしないように、おおよそどのくらいの時間で往復することができるかということまで細かく予測してエリナーに伝え、そして「厳粛な面持ちで［エリナー］の手をとって、彼女には聞こえないような低い声で二言三言つぶやき」、そして母親を迎えに去って行った。[28] 何という理想的な介護人の伴だろう。病気の肉親をかかえ、たまらない不安に襲われているエリナーにとって、寡黙な彼がもたらす慰めは、この人なら、いつもどんなことでも受け止めて、適切な対処をしてくれるという安心感から始まって、必要なことを、それも必要なことのみを察知する判断力、そして手際良く実行してくれる有能さ、困難な時期に友達を支えようとする思い遣り、それを静かに示す優しさ、それらが組み合わさって提供されるものだ。

ブランドンとジェニングス夫人は、同じ家にいて姉妹を支えている。病人のすぐ近くにいる姉、エリナーがどのように描かれているのか、改めて追ってみよう。そもそも、この姉妹の家族は、人に快適さを与えるのが上手かった。小説の冒頭で、彼らは、人の世話をして慰めと快適さを与える一家として紹介される。老人が、財産の相続人である甥とその家族を自分の屋敷に招き、そのおかげで彼は晩年を快適に過ごすことができた。甥夫妻は「利害関係からというよりも善良であるがゆえに」、老人に注意を傾け、それがその年齢の人にしてみれば可能な限りの「確固とした慰め」を与え、「子どもたちが陽気にしているので、彼の生活は楽しくなった」。[29] その甥夫妻の子供たちというのが、エリナーたち姉妹である。

マリアンヌの具合が悪くなった最初のうちはエリナーは極めて楽観的である。彼女の注意は、マリアンヌに向けら

れるというよりも、マリアンヌのことを「恋する人がもつ必要以上の恐れ」をもって心配するブランドンに注がれている。[30] ブランドンが、彼女を信頼できる友人とみなして話しかけてくるので、ジェニングス夫人がブランドンはエリナーに気があるのではないかとしきりにエリナーをけしかける。「彼がマリアンヌのことが好きだということを知っていなければ、自分でももしかしたら」と思ってしまうほど、彼はエリナーと話したがる。けれども、「ジェニングス夫人は彼の行動をみている」ので、わからないであろうが、彼女は「彼の目を見て」、そして「言葉では表現されない」ものの、彼の「マリアンヌの容体を気遣う表情」を認識しているので、彼に思われているのはマリアンヌであることがエリナーわかっていると描写される。[31] こうして、マリアンヌの病気は、エリナーにとって、ブランドン観察の機会となる。勿論、彼女は熱を出している妹を放っておくわけではなく、「ごく簡単な治療法をひとつふたつ」試してみるようマリアンヌに勧めることくらいはする。[32] それでもよく眠ればそれで大丈夫だと信じている。いったん回復し、そして具合が悪くなったときには、ベッドを整えるために起き上がったので、それで疲れただけだと理由を探し、眠れば良くなるだろうと楽観を保つ。

しかし、その夜、寝苦しそうにして、「お母さんは来てくれるところなの?」と言うマリアンヌを見て、彼女は我を失う。それでもマリアンヌを落ち着かせようとして看護者の立場に自らを据えて気を取り直し、脈をとる。脈は弱弱しくて早い。[33] こうなると、「彼女はそれまで落ち着いていた分余計に心配になった。」マリアンヌが母親のことを口にする度に、病気を軽視して母親に連絡をとらずにいたことが悔やまれ、エリナーにとっては苦しみとなり、最悪の事態を予想して、娘の臨終に間に合わなかった母親、あるいは理性を失った娘にしか会えない母親を空想して、自分を責める。[34] ハリス氏が大丈夫だと言うが、その言葉はエリナーの「耳には届いても、心には届かなかった。」彼女は、「母親のことを考えるとき以外は冷静だったが、望みは失っていた。[35]」映画では、自分にとって、性格の異なるマリア

ンヌがいかに大切であるかということを訴えるエリナーが印象的だったが、原作のエリナーは、自分の必要を訴えるのではなく、母親を悲しませてしまうことを非常に気にして、それも死ぬ前に一目会わせることを自分が妨げてきたのかもしれないと思って苦しむ。そして翌日、マリアンヌの状態が好転したときには、彼女はその良い状況を受け入れることをためらい、慎重だ。「注意して、失望することを恐れて、だまっていたが」、「妹の脈が少し改善したように思えるような気がして、そして望みをもってもいいようにも思われて、彼女はじっと待ち、脈を何度も確かめた。そして、それまでの不安は冷静さで隠していたが、とうとう、表面の冷静さでは隠しきれないほど興奮しながら、希望を口にした。」糠喜びにならないようにと、「希望をもってはだめだと自分にいいきかせるのだけれど、それは手遅れだった。希望がもうすでに心に入り込んでいた。」そして、マリアンヌの回復が現実であることが確信されると、「エリナーは陽気にはなれなかった。彼女の喜びは違った類のもので、にぎやかに喜んだりはしなかった。…彼女の心は申し分のない安らぎの感覚で満たされて、熱意をこめて感謝した。けれども彼女は言葉や笑みで喜びを外に表すことはしなかった。エリナーの胸の内では、すべてが静かで強い満足だった。[36]」

● 最後に

『分別と多感』の中で、オースティンは、希望、期待といった未来に向けての展望について述べるときの言葉の使い方にかなりの注意を払っている。たとえば、マリアンヌやダッシュウッド夫人の希望的観測について、根拠のないはずの推測から確信に近いものに変化する様子、あるいは、エリナーの希望、気休め、期待、事実の違いの認識、いずれも段階を追って区別され、注意深く描写される。

マリアンヌと母親にとって、あるとき憶測したことは、次の瞬間には信ずることとなり、「そうはならないとわかっているけれどこうなれば良いなあ」と思うことは、「そうなってほしいなあ」と望むことに転じ、「そうなってほしいなあ」と望むことは、十分な理由があって「予期する」ことへと転ずるということが、彼女［エリナー］にはわかっていた。［強調筆者］

She [Elinor] knew that what Marianne and her mother *conjectured* one moment, they *believed* the next – that with them, to *wish* was to *hope*, and to *hope* was to *expect* [emphasis mine][37].

（たとえ確かにそうなると思っていても）望ましくないことが起こるであろうと予期することと、それが事実として確定することは、まったく違うとエリナーは今になってわかった。知らず知らずのうちに、自分が常に望みをもっていたのだと…わかった。…彼女は自分の心に根拠のない希望が宿っていたことを咎めた。知らせを聞いて受けた苦痛はそのためにとても激しかった。［強調筆者］

Elinor now found the difference between the *expectation* of an unpleasant event, however certain the mind may be told to consider it, and *certainty* itself. She now found, that in spite of herself, she had always admitted a *hope*... And ... she condemned her heart for the lurking *flattery*, which so much heightened the pain of the intelligence [emphasis mine][38].

人生の行く末を薔薇色に思い描いて、「将来幸せが訪れるという明るい希望をもつこと、そのこと自体が幸せである」という言葉は、一見魅力的に思えるのであるが、これは根拠のある期待と勝手な希望の区別のつかない、感情に支配されがちなダッシュウッド夫人の、良い時はとことん至福の境地に浮かれ、悪いときは極端に絶望して落ち込む波の激しさを描写するときのオースティンの言葉である。[39] そういう感情の揺れの大きなダッシュウッド夫人や、同様の傾

向にあるマリアンヌも、最後には静かな満足に包まれることになるが、エリナーに関して、そして、ジェニングス夫人とブランドンに関しても、一貫して問題になっているのは、希望や恐れにどう注意深く対処するかだ。恐れを抱いたとき、この人たちは個々人で静かに戦っている。集まって助け合い、困難を解消することはできるし、またそれを積極的に行っていこうとするが、現実の困難の解消と、恐れに囚われた気持ちへの対処は別で、恐れは他人が消し去ることはできず、それぞれが自分の恐れに立ち向かわなければならない。そして、恐れよりも更に意識して対処しなくてはならないのが、希望である。やみくもに希望を抱いたり、根拠なく楽観的に前向きに生きることは警戒をもって描かれ、静かな満足感をもつことに、より大きな価値を見出している。この静かな満足感が、オースティン作品が与える慰めや幸福感を支えている。

『高慢と偏見』も、『分別と多感』も、ダブルウエディングでめでたしめでたしとなり、読者にシンプルに幸福感を与えるが、冷静に考えてみると、ダーシーのように富裕で社会的階層の高い人物が、同じジェントルマンの娘であるとはいっても、エリザベスに求婚することはあり得ないと言われる。ブランドンとマリアンヌにしても、ブランドンのマリアンヌへの愛情が描かれ、彼の親切な行動にたいするマリアンヌの感謝は納得するが、この二人の結婚は十分説得力があるだろうかと疑問をなげかける論文もある。スパックスが主張するように、オースティンが作る世界は、感情移入することができる登場人物が不幸なままでは終わらないだろうと読者に確信させる、ものごとを託しておいて大丈夫だと思わせる頼れるナレーターをもっている。現実世界では実現しえないような公正さが必ず達成される世界を支えているのは、ナラティヴの構成だと考えることもできる。[40] ジョンソンは、これを作者の現実によりひきつけて、個人が自分の幸福を追求する権利の是認と読んだ。一方、結末に至る過程で、希望や幸福感に、このように関心を向け、現実と個人の感情との間の関係に細心の注意を払うことで、オースティンは、作品を読者の現実に引き付け

ることも達成している。結末にめでたしめでたししか読み取らない読者は、実は「過度の楽観による陽気な状態」を経験しているだけなのかもしれない。ジェイン・オースティンは、そのような仮の幸福感を作りだすことにも巧みなのだ。

注

1 たとえば、次のような記述や論文で、一般及びアカデミックの間でのオースティン人気の勢いを知ることができるであろう。'Currently, Austen's works are one of the most written-about and debated *oeuvres* in the academy.[citation needed] In popular culture, a Janeite fan culture has grown up centred on Austen's life, her works, and the various adaptations of them' (Wikipedia at http://en.wikipedia.org/wiki/Jane_Austen); Claudia L. Johnson, "Austen Cults and Cultures," in *The Cambridge Companion to Jane Austen*, ed. Edward Copeland and Juliet McMaster (Cambridge: Cambridge University Press, 1997), 211-26.

イギリス、北米、オーストラリアを始めとして Jane Austen Society は、世界各地で活動しており、日本オースティン協会も二〇〇七年に設立された。

映像化ブームは、一九九五年の *Pride and Prejudice* (BBC), *Sense and Sensibility* (Ang Lee 監督) くらいから始まり、主要六作品すべてが（その多くが複数回）映像化されている。また、オースティンの生涯も映像化の対象となり、*Becoming Jane* (Julian Jarrold 監督、2007), *Miss Austen Regrets* (BBC, 2007) が制作されている。他に、オースティン作品をベースに、Helen Fielding, *Bridget Jones' Diary* (1996); Karen Joy Fowler, *Jane Austen Book Club* (2004); Laurie Viera Rigler, *Confessions of a Jane Austen Addict* (2007) などの作品も書かれている。

2 Christopher Kent, "Learning History with, and from, Jane Austen," in *Jane Austen's Beginnings: The Juvenilia and Lady Susan* ed. J.

David Grey (London: UMI, 1989), p. 59.

3 An obituary of H.F.B. Brett-Smith, in ***The Times***, Jan 20, 1951; pg. 8; Issue 51904; col F.

4 Terry Eagleton, *The English Novel* (Malden, Mass.: Oxford Blackwell, 2005), p. 106.

5 Andrew Sanders, *The Short Oxford History of English Literature*, 2nd ed. (Oxford: Oxford University Press, 2000), p. 371.

6 'The Janeites' in Rudyard Kipling, *Debits and Credits*, ed. Sandra Kemp (Harmondsworth: Penguin, 1987), pp. 119-40. この作品の中の主な語り手である Humberstall という人物は、オースティンの整然とした文章への戦場での愛着をコックニー（ロンドンの労働者訛り）で語る。

7 Terry Castle, Introduction to Jane Austen, *Emma*, ed. James Kinsley (Oxford: Oxford University Press, 1995), vii-xxviii.

8 *Path*. 'A word used to express well-being, or the perfect ease and comfort of healthy persons, especially when the sensation occurs in a sick person' (*Syd. Soc. Lex.*). Now freq. in non-technical contexts: a state of cheerfulness or well-being, esp. one based on over-confidence or over-optimism. *Oxford English Dictionary* (2002).

Syc.Soc.Lex. は、Sydenham Society, *Lexicon of Medicine & Allied Sciences*

9 Austen, *Emma*, ix.

10 Ibid., xxi.

11 Ibid., xxiv-xxvi. 一方で、たとえば Alice Maynell は、オースティンが子どもを登場させるのは、母親の愚かさを描写したいときであって、オースティンは子どもに対する無関心を露わにしていると評した。Pall Mall Gazette (February 16, 1894), quoted in Jane Austen, *Sense and Sensibility: Authoritative Text, Contexts, Criticism*, ed. Claudia L. Johnson, A Norton Critical Edition (New York and London: W.W. Norton & Company, 2002), pp. 320-21.

12 Claudia L. Johnson, *Jane Austen: Women, Politics, and the Novel* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1988), pp. 73-93.

13 Ibid., esp. p. 74.

14 Deidre Lynch, ed., *Janeites: Austen's Disciples and Devotees* (Princeton, N.J.: Princeton University Press, 2000).

15 Boyd Tonkin quoted in Ibid., p. 8.

16 Mary Poovey, *The Proper Lady and the Woman Writer : Ideology as Style in the Works of Mary Wollstonecraft, Mary Shelley and Jane Austen*, Women in Culture and Society (Chicago; London: University of Chicago Press, 1984), p. 183.

17 バトラーは、マリアンヌ個人についてはオースティンは厳しく批判するのでも、嘲笑するのでもなく、彼女が批判しているのは、個人の感傷・感情に耽溺する個人主義であり、そして個人主義を掲げる急進思想であると分析している。Marilyn Butler, *Jane Austen and the War of Ideas* (Oxford: Clarendon, 1975), pp. 192-94. 一方で、Tony Tannerが述べるように、感受性の文化自体をとりあげてそれについて明言しようとしているのではないというのも説得力をもつ。Introduction to the Peguin edition of *Sense and Sensibility* (Harmondsworth: Penquin, 1969), p. 32.

18 Jane Austen, *Pride and Prejudice*, ed. Donald Gray, Third edition. (New York and London: W.W. Norton & Company, 2001), p. 4.

19 Austen, *Sense and Sensibility: Authoritative Text, Contexts, Criticism*, p. 220.

20 Ibid., p. 216.

21 Ibid., p. 217.

22 Ibid., pp. 219, 221, 222.

23 Ibid., p. 221.

24 Ibid., p. 219.

25 Ibid., p. 217.

26 Ibid., p. 220.

27 Ibid., p. 220.

28 Ibid., p. 221.

29 Ibid., p. 5.

30 Ibid., p. 216.

31 Ibid., p. 216.

32 Ibid., p. 217.

33 Ibid., p. 220.

34 Ibid., p. 221.

35 Ibid., p. 222.

36 Ibid., p. 223.

37 Ibid., p. 18.

38 Ibid., p. 252.

39 "In seasons of cheerfulness, no temper could be more cheerful than hers, or possess, in a greater degree, that sanguine expectation of happiness which is happiness itself" (Ibid., p. 9).

40 Patricia Ann Meyer Spacks, *Desire and Truth: Functions of Plot in Eighteenth-Century English Novels* (Chicago: University of Chicago Press, 1990), p. 217.

Austen, Jane. *Emma*. Edited by James Kinsley. Oxford: Oxford University Press, 1995.

———. *Pride and Prejudice*. Edited by Donald Gray. Third edition New York and London: W.W. Norton & Company, 2001.

———. *Sense and Sensibility: Authoritative Text, Contexts, Criticism*. Edited by Claudia L. Johnson, A Norton Critical Edition.

New York and London: W.W. Norton & Company, 2002.

Butler, Marilyn. *Jane Austen and the War of Ideas*. Oxford: Clarendon, 1975.

Eagleton, Terry. *The English Novel*. Malden, Mass.: Oxford Blackwell, 2005.

Johnson, Claudia L. "Austen Cults and Cultures." In *The Cambridge Companion to Jane Austen*, edited by Edward Copeland and Juliet McMaster, 211-26. Cambridge: Cambridge University Press, 1997.

———. *Jane Austen: Women, Politics, and the Novel*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1988.

Kent, Christopher. "Learning History with, and from, Jane Austen." In *Jane Austen's Beginnings: The Juvenilia and Lady Susan* edited by J. David Grey. London: UMI, 1989.

Kipling, Rudyard. *Debits and Credits*. Edited by Sandra Kemp. Harmondsworth: Penguin, 1987.

Lynch, Deidre, ed. *Janeites: Austen's Disciples and Devotees*. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 2000.

Poovey, Mary. *The Proper Lady and the Woman Writer: Ideology as Style in the Works of Mary Wollstonecraft, Mary Shelley and Jane Austen*, Women in Culture and Society. Chicago; London: University of Chicago Press, 1984.

Sanders, Andrew. *The Short Oxford History of English Literature*. 2nd ed. Oxford: Oxford University Press, 2000.

Spacks, Patricia Ann Meyer. *Desire and Truth: Functions of Plot in Eighteenth-Century English Novels*. Chicago: University of Chicago Press, 1990.

（すずき　みか　静岡大学人文学部）